

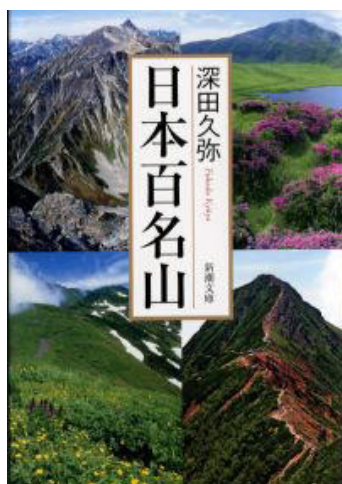
— 深田久弥という人と山 —

(記 岡本)

(1) (その人)

「読み 歩き 書いた 妻志げ子」は深田久弥の墓碑石に刻まれ、「百の頂に百の喜びあり」は顕彰碑に刻まれている。深田久弥は昭和 46 年の春分の日に卒然と逝った(享年 68 才)。山梨県茅ヶ岳を登山中、頂上付近で脳卒中を起こして倒れ、日本山岳会のメンバーに看取られて(当時深田久弥は日本山岳会の副会長)、山を抱くようにして眠ったという。

深田久弥は「日本百名山」(昭和 39 年刊)の著者である。山の愛好家でこの本を読んでいない人は少ないと思われる。山を歩き始めて 10 年程になるが、今年の正月に漸く読んだ。深田久弥の名前は数年前から知っていたものの、専ら低山歩きしている者にとって百もの名山は取っつきにくく、本屋でパラパラとめくってみたことはあったが、読んでみようとはまでは興味をそそわれなかった。読んだのは、新潮文庫「日本百名山」(昭和 53 年 11 月発行)で平成 26 年 11 月現在 55 刷であった。55 刷という程に読まれていることに驚いた。



深田久弥は 50 年以上山を経験し、その間に百山の何倍もの山行をした経験や山に関わる歴史・文化についても古文献にあたって得た知識を基に、「品格」「歴史」「個性」を基準にして百山を選択したという。「日本百名山」は登山家でもある作家のものだけに読ませるもので、多くの人々に登山の面白さを教え、登山隆盛の一翼を担ったと言える。

「日本百名山」は山の紹介を基本に置いているので、同書から深田久弥の「登山考」や人物像について知り得ることは多くない。そんなことから、参考資料のような書籍などを渉猟して、登山考や人物像を探ることを試みた。

深田久弥の業績や人柄について、「名もなき山へ」の解説を担った雁部貞夫は次のように記している。人柄について、「自分らしさ」を貫いた人、男女を問わず誰からも「愛されし人」だったという。著述家としての業績は、二つの車輪ともいえる「日本百名山」であり、「ヒマラヤの高峰」(決定版 昭和 47 年刊)である。「日本百名山」は昭和 40 年第 16 回読売文学賞(評論・伝記の部)を受賞し、「ヒマラヤの高峰」は多くのヒマラヤ志願者の拠り所となりバイブル的な存在となった等褒めるところは十分に褒めている。人柄を生々しく推測させる私生活の履歴部分については、解説の全体の分量からみて極めて少ないのは当然かも知れないが、雁部貞夫は次のように記している。深田久弥は東京帝大哲学科在学中、改造社の編集委員となり、その後大学を中退し、文学を志す北畠八穂と親の承諾を得ず「深田流」の結婚をする。「その後、深田は鎌倉文士として成功を収めるが、木庭志げ子(大学後輩の文芸評論家中村光夫の実姉で旧制高校時代の片思いの相手)と再会し恋愛に突き進む。病身(脊椎カリエス)の妻八穂を捨てることになるのであるから、

これも常識人の行動ではありえない。鎌倉文士の座を捨てて、この恋愛を貫いてしまう。志げ子と正式に結婚したのは昭和22年であり、その時すでに志げ子夫人との間に生まれた長男森太郎は6才になっていた」という。我々常識に捉われている者が深田久弥の登山を含む人生という生きざまをみるには、上述の鉤括弧の部分の視点をどうしても蔑ろにできないと思う。

深田久弥は登山のどの部分に関心をもち、感動し、満喫していたのか。「日本百名山」や参考資料などを読んでみて気づいたのは、眺望を楽しむことに殊の外関心を示していることである。「山岳展望」への執着心を示している。「壮観である。しばらく立ち止まって見とれていた」「この仙郷の風景を楽しんだ」「峠上の草原に寝ころんで、長い間この眺めを享樂した」等の記述をしている。また「深田久弥の山さまさま」の「秋の穂高・槍」の項では「槍ヶ岳の穂はすぐ目の前にそそり立っている筈だが、雲に閉じこめられて見えない。ここから30分もあればその頂に立つことができるのだが、眺望の利かない頂など何の意味があろう」と頂上を目指さなかった。展望のない頂上を目指さないのは、本人の意思であり、とやかく評すべきではないが、人格を疑わせる所業をしている事例がある。同じく「湯沢の一年」の項で、中国から復員(昭和21年7月)して志げ子と森太郎が疎開している越後湯沢で3人で住んでいた時、家族づれで越後湯沢の裏山ともいべき大峯にかけた時のことを記している。大峯への行程には、西国三十三番、坂東三十三番さらに秩父三十三番の地蔵があり、この地域の信心深いお年寄り、毎年6月に三つの地蔵菩薩を巡るため山廻りをすると記した後、「(自分は)信心などみじんもなく、ただ燃えるような山の紅葉に染まって来ようという僕の家族、僕と家内と五つになる男の子の三人は張り切ってこの途についた」「ずっと道の両側が紅葉で見晴らしが利かない。その立木が少し透けた個所を選んで、われわれは道端に坐りこんで今日の馳走を拵げた。透けた所から遠い山を眺めるのだが、それでは充分でないので、地蔵さんの上に御免蒙って上がり、そこから地図を片手に山岳展望をほしいままにした」と展望に執着している。信心はないと告白しているが、普通の人でも考えられないこと、ましてや帝大出身の教養人(学歴と関係ないが)が展望をえるために地蔵菩薩の頭上に上るだろうか。御免蒙ってと言うところを見ると、良心に咎めるところがあるのだろうが、地蔵菩薩などに信心はないからといって、足にしても構わないというものではない。古い言い方だが、人の道に悖る行いではないかと思われる。恥ずべき行為を正直に臆面もなく書いているところにも問題がありそうだ。

越後湯沢居住時代の前後を概観する。鎌倉文士として認められて更に飛躍をしようとしていた頃、昭和19年に召集され、終戦後1年間の中国抑留を経て、昭和21年7月に復員した。鎌倉にいる深田八穂夫人の元に帰った後とんぼ帰りに愛人志げ子と森太郎の疎開先の越後湯沢に行き、鎌倉には戻らなかった。昭和22年9月越後湯沢から郷里の石川県大聖寺町(現 加賀市)に移る。大峯には昭和21年10月中旬頃に上り、「御免蒙る行い」をしたのである。志げ子とは昭和22年2月に婚姻届を出した。正妻の八穂は脊椎カリエスで歩行も困難であったが、顧みられなかったのである。大峯には、志げ子と不倫関係の時期に子森太郎と三人で上り、その山行を公表しているのであるが、「僕の家内」と書くには内心忸怩たるものがあつたであろう。大峯の出来事は、深田久弥の山岳展望への執着心と山の品格ならぬ人柄を知ることができる事例の一つである。参考資料を読んだ限りで言えば、深田久弥が愛人がいると書いているところが一箇所だけある。「名もなき山へ」の「歌の思い出」の項で、深田久弥は戦前毎月の新響(日響の前身)の定期

演奏を聴きに行っていたと書き、「ジュピターを聴いたのは愛人と一緒であった」とだけサラリと書いている。も一つ、微妙なものがある。同じく「自然なものが好き」の項で「私は自分の精神には三重カギをかけたいようなプライバシーはあるが、現実の生活には覗かれてやましいものは何一つない」と言っている。どんな鍵師も開けられない三重カギをかけたい秘密とは何だろう。

追い打ちをかけるようで心苦しいが、「日本百名山」の中から関連部分を紹介する。「魚沼駒ヶ岳」の項で、八海山の頂上に不動明王が祀ってあるのを見て「そういうモニュマンはわれわれにとって縁がないが、そこから水無川を距てて見る駒ヶ岳は実にみごとである。」、「赤城山」の項で「赤城山ほど人に親しまれてきた山も少ない。と言っても、宗教とか信仰とかの古くさい日本的の山ではなく、高原と湖と牧場の洋画的風景が近代人の嗜好に応じたのであろう。」と記し、山岳展望を志向していると同時に、「宗教とか信仰とかの古くさい日本的の山」への嫌悪のような感情を表白している。「日本百名山」の100座を読んで、自分なりに山岳信仰、修験道等の歴史をもつ山を数えたところ、60座あった。とするならば、古くさい日本的の山に上らなければ、そもそも「日本百名山」など成り立たないのである。深田久弥は百名山の選定基準として「歴史」をあげて「私は歴史を尊重する。昔から人間と深いかわりを持った山を除外するわけにはいかない。人々が朝夕仰いで敬い、その頂に祠をまつるような山はおのずから名山の資格を持っている。山霊がこもっている…」としている。併せて、近年観光地化、通俗化して、もはや山霊も住む所がなくなっているような山は選ぶわけにはいかない、としている。山の歴史を基準とすると述べている内容と実際の百名山の記述内容に上述のように齟齬がみられないだろうか。地藏菩薩を足にした大峯登山の例もあり、この齟齬は何なんだろうかと腑に落ちないのである。山の「歴史」とは、いつ頃噴火あるいは隆起して山が形成されたというのではなく、人間と深い関わりを持っているか否かを考慮するとしている人物が、上述のようなことを言うのであろうか。くどいようだが、更に論旨を補強するために、深田久弥が薬師岳で宝剣の柄を拾って1953年頃文鎮に使っていたことを紹介する。「薬師岳頂上の祠の前には、たくさんの錆びた宝剣が散乱していた。…参拝登山者が鉄で作った宝剣をたずさえて頂上の祠に奉獻するのが習慣だったらしい。…私はその剣の中から形のいい柄の切れはしを拾って持って帰った。それは今この文章を書いている原稿用紙の上に載って文鎮の役目を果たしている。」（「深田久弥の山さまざま」の「薬師から槍」の項）と正直に記している。宝剣を奉獻した参拝者は、宝剣の一部とはいえ深田久弥に文鎮として使われたことを知ったら、どう思うだろう。他の多くの人が同じように宝剣の一部なりとも持って帰ったら、参拝登山者が心から奉獻した宝剣は跡形もなくなるであろう。それは信仰への冒瀆である。

今西錦司は「山岳省察」の「山への作法」の項で「登山家になるには山歩きの礼儀を知らなければならぬ。わざわざ獣も通らぬ道に行くような無作法をしない。生まれながらの獵師のような謙虚さが欲しいと思う。」と記している。登山家は先ず謙虚さを身につけ、大胆・勇氣は然る後に発揮せよということではないか。

(つづく)